

別紙2

審査の結果の要旨

論文題目：Поэтика стиля Андрея Платонова: перспективы риторического подхода
(アンドレイ・プラトーフの文体の詩学：レトリック分析の展望)
Poetics of Andrei Platonov's style: perspectives of a rhetorical approach

論文提出者：野中進

提出論文は、20世紀ロシアを代表する作家、アンドレイ・プラトーフ(1899-1951)の作品の比喩を中心とした文彩（レトリック）分析に本格的に取り組みロシア語で書かれた、国際的なプラトーフ研究および20世紀モダニズム文学研究に大きく貢献する優れた論文である。

従来、プラトーフの文学は、その世界観およびそれを描く文体の特異性を指摘されてきた。しかし、その文体の特性をプラトーフの初期から後期に至る多種の作品の具体例を取り上げ、丹念に分析しながら、レトリックの中でも特に「状況の直喩」と「兼用法（*syllipsis*）」に着目し、それらがプラトーフの代表作の中でいかなる役割を果たしているかなどを、実証性の高い手法で突き止めたのは、本論文によって初めて成し遂げられた功績である。

本論文は、序論、結論を除いて、三部構成、全十章から成る。以下、その内容を要約する。

序論では、プラトーフに関する先行研究を詳細に紹介しつつ、それらを踏まえた上で対比する形で、本論文の主な論点が説明される。

第一部は、「プラトーフの文体の進化：メタファーとメトニミーの相関の問題によせて」と題され、第1章では、初期の詩において定型的なメタファーに基づく抒情性の表現が志向されることが突き止められた。

第2章では、初期プラトーフの未完の中編における比喩・文彩を分析し、そこに「抒情性の乗り越え」の試みがあったものの、自身の「生活の言葉」だけではこの課題が果たせなかったことが確認された。

第3章では、長編小説『チェヴェンゲール』における直喩の反復が分析される。定型的な直喩が、細かな変奏を重ねて幾度も反復されるが、主題・プロット上も「反復」があり、比喩と主題に照応があることが確認された。

第二部は、「プラトーフにおける伝統的文彩の意義と役割」と題され、第四章では、『チェヴェンゲール』における「状況の直喩」に着目し、状況の直喩の集積がメインプロットと並行するイメージ群を形成し、それがさらに大きな全体性を暗示する二重の意味作用をもつ点が確認された。

第五章では、『チェヴェンゲール』における視点の問題に関して、焦点化の技法が分析される。焦点化は自由間接話法の発展とともに、プルーストやウルフなど20世紀前半の

モダニズム文学において用いられたものであるが、プラトーフにおける焦点化の雑多な組み合わせは、作品世界の多視点性を深めている点を確認された。

第六章では、中編小説『土台穴』で顕著な役割を果たす文彩「兼用法」に着目し、原文テキストと複数の翻訳を比較しながら、プラトーフの「兼用法」を詳しく分析し、それがメトニミー的原理に基づき、世界の「未分化な全体」を表現するのに役立っている点を明らかにされた。

第7章では、『土台穴』のメトニミー表現が、G.ライルの「カテゴリーミステイク」と柄谷行人の「教える—習う」の概念を用いて考察され、『土台穴』のメトニミー表現は、「共通の言語」を持たぬ人間間の対話の生成と意味作用を表していることが突き止められた。

第三部は、「プラトーフの文体の形と意味：レトリック分析の展望」と題され、第八章では、20世紀前半のモダニズム長編小説において直喩が担った機能について、ブルースト、ウルフの作品と比較しながらプラトーフの長編を分析し、「ポスト・リアリズム」小説では、直喩を単なる比喩・文彩でなく構成原理として用いることが三人に共通する手法であったことが解明された。

第九章では、プラトーフがしばしば用い、かつ独特な使い方をする動詞「慣れる *привыкнуть*」を取り上げ、その用法分析を通じて彼の人間観において「時間性」がもつ意味が考察された。ここには「理念と習慣」、「計画と慣れ」、「新しいものと古いもの」の葛藤が見られ、プラトーフの伝統主義についても考察された。

第十章では、妻宛ての書簡に使われた「大地を通して彼（彼らの一人息子）に接吻してくれ」という特異な表現に着目し、それがいかにして現れたか、そのプロセスを丹念に追ひ、より定型的な表現の反復・変奏を通じて新奇な表現が現れるプラトーフの「文体の詩学」を明らかにした。

結論では、従来のプラトーフ研究では、作品のテーマ・思想研究、神話学との関連などに重点が置かれていたのに対して、本論文では、プラトーフの比喩研究におけるメタファーとメトニミーの相関、プラトーフの創作における「新奇なもの」と「古いもの」について、世界文学のコンテキストにおけるプラトーフといった論点で、プラトーフのテキストの比喩・文彩が具体的・実証的に検討されることがまとめられている。

審査委員会では、本論文の着眼点の独創性、論証の説得性に高い評価が与えられた。プラトーフの特異な文体の比喩表現に焦点を当てて分析した本論文は、母語をロシア語としない者が取り組む課題としては極めて困難なものに果敢に挑戦し目的を十分に達成したものである。プラトーフの比喩・文彩の独自性を分析するに当たり、例えばプラトーフ作品の英語、フランス語、チェコ語、日本語など複数の翻訳を比較するという手法を用いることで、外国人による文体分析の研究方法の強みを発揮したと言える。

また、従来、プラトーフの特に後期作品の文体には新奇性、グロテスク性、メトニミー的表現などが圧倒的に多いとされてきたが、本論文では、詩人として出発したプラトーフ

ノフが、定型性、抒情性、メタファー的表現などを初期の散文作品から後期の小説に至るまで、その創作の軌跡の中で少しずつ展開しながら保持し続けたことが解明された。

さらに「状況の直喩」が単なる文彩としてだけでなく、メインプロットと並行するイメージ群として機能していることや、「兼用法」が、共通の言語を持たない人間同士のコミュニケーションの常態を表していることなど、プラトーフ作品の文体の多くの重要な特徴が明らかにされた。

最後に、本論文でプラトーフの文体的試みが、リアリズムを超えた後の同時代の世界のモダニズム文学の試みと呼応し合うものであることが、プルースト、ウルフなどの文体との比較で解明された。

以上のように、本論文には多くの長所があるが、審査においては、いくつかの注文も出された。それは、プラトーフの比喩・文彩が20世紀前半の西欧のモダニズム文学とは比較されているが、より広いコンテキストで、例えばドストエフスキーやゴーゴリとの比較があれば、一層興味深い内容になっただろうということである。また本論文はプラトーフの文体を初期から後期に至るまで広く取り上げて分析しており、創作の軌跡を辿る意味でもそれは意義深いものであるが、各章の論をもう少し深めて展開した方が良かったのではないか、などである。

しかし、これらは本論文の欠点というよりは、今後の研究をさらに展開する際の課題といふべきものであり、提出論文が世界的プラトーフ研究に新たな大いなる貢献をなしたことは間違いない。したがって、本審査委員会は、全員一致で、本論文が博士（学術）の学位を授与するに相応しいものであると認定した。